

アユの放流技術開発について

資源研究部 どいぐち 土井口 ゆたか 裕

はじめに

アユは熊本県の河川で漁獲される重要な魚種で、球磨川や緑川をはじめとする多くの河川で漁獲されています。また、アユの人工種苗の放流も行われていますが、漁獲量は減少しています。そこで資源研究部では、放流サイズや時期について検討を行い、効果的な放流技術の開発を行っています。

取り組み内容

現在、アユの放流は4月に約3.5gサイズ（通常群）で行われています。今回、緑川水系御船川の七滝地区において、これよりも小さいサイズの2.5gサイズ（早期小型群）を3月に放流し、2つの放流群の比較を行いました。

昨年度（2020年度）の調査では、アユの漁獲解禁日直後の6月1日の友釣り、投網・刺網で漁獲したアユの平均体重は、早期小型群も通常群も目標サイズの40g（全長約17cm）に到達していました。

8月下旬には、早期小型群、通常群共に平均体重が100g以上に、9月上旬には平均体重150g以上に成長しました。

また、解禁日から8月上旬までの漁期前半は早期小型群が漁獲された割合が8割を占めていましたが、8月下旬からの漁期後半では通常群が漁獲される割合が多くなりました。このように、2つの放流群を組み合わせることで漁期を通して安定してアユが漁獲される結果となり、早期小型群のアユも放流手法として有効である可能性が示唆されました。

早期小型群のメリットとしては、餌料や人件費などの中間育成にかかるコストの削減、早い段階から自然環境の中で育つことでより天然に近いアユに育つことなどがあげられます。

今年度（2021年度）は昨年度の結果の再現性を確認するための調査を行っています。

緑川水系御船川の七滝地区に早期小型群（2.5g）を3月25日、脂鱗をカットし標識を付けた通常群（3.5g）を4月21日にそれぞれ1万尾放流しました。

アユの漁業解禁日である6月1日以降から緑川漁協の組合員の方々と一緒に、友釣り、刺網・投網における試験漁獲を行なって、早期小型放流群と通常放流群の成長や状態を調査しているところです。

今年度よりアユの事業担当となり、熊本県におけるアユの重要性を日々学ばせて頂いています。日頃の業務では、実際に現場に出向いて漁業者の方や漁協職員の方々と一緒に業務を行うことやお話をさせていただくことが多く、アユの種苗放流や資源管理に関する厳しさや難しさを感じています。

今後も少しでも熊本県の水産業に貢献できるよう、また、熊本県の豊かな河川が活気にあふれるよう日々仕事に取り組んでいきたいと思ひます。



令和3年4月に実施した通常群の放流



放流されたアユ



友釣り



投網